

## 子どもの日本語教育を担う指導者育成教育の実践 —JSL バンドスケールを活用した教育委員会の事業化の試み—

河上 加苗・川上 郁雄

### 要 旨

日本語指導が必要な児童生徒が学校現場で増加する現状を踏まえて、東京都目黒区教育委員会が実施した日本語指導員の養成・研修コースの初年度の内容と実施状況を述べ、研修を受けた研修生の声も含め、本研修の結果を報告する。インターネット上のテキスト、JSL バンドスケール、ライブセッション、学校での実践、実践研究会等、立体的な構造をもつ養成・研修コース自体の意味と有効性を示し、区内の日本語指導の体制と質を維持する人材確保の持続可能な方法を事業化する試みを示した。

### キーワード

子どもの日本語教育 指導員の養成・研修 JSL バンドスケール 教育委員会主催事業

### 1. はじめに

日本語指導が必要な児童生徒が学校現場で増加する傾向が全国的に見られる。その現状の中で、東京都目黒区教育委員会（以下、教育委員会）は、2024年度「日本語指導員の養成・研修コース」（以下、本コース）を独自に事業化し、実施した。この事業の目的は、区内の小中学校に在籍する「日本語指導が必要な児童生徒」（以下、JSL児童生徒）の日本語指導に携わる人材を育成し、これらの子どもに実際に日本語指導を行える指導員を確保することである。本報告は、教育委員会教育指導課が主担し実施した本事業が、どのような期間と内容で実施されたのか、また研修を受けた参加者にどのような学びがあったのか、日本語教育の指導者養成教育の実践として記すものである。

なお、本報告は、本コースを立案し、教育指導課で日本語教育コーディネーターを務める河上と、年少者日本語教育に長年携わり、「JSL バンドスケール」を開発し、本コースで講師を務めた川上が共同執筆した。

### 2. 「養成・研修コース」の概要

本コースは、座学の後に実践を行うのではなく、年少者日本語教育の基本を学びながら同時に学校現場で実践を行うという意味で、養成と研修が同時に行われるオン・ザ・ジョブ・トレーニング（On-the-Job Training : OJT）の形式をとった。

本コースは2024年度当初より計画され、早稲田大学大学院日本語教育研究科（以下、日

研) の協力を得て、日研修了生および在籍者を対象に「説明会」を含む参加者募集を行った。日本語指導に係る謝金等の支払いも説明された。その結果、7名から参加の申し出があり、2024年7月より3週間の「事前研修」を経て、「研修生」が選出された。

その後、本コースが本格的にスタートし、以下の順序で進む。

①「テキスト購読」8月末以降。

講師の川上が作成したテキスト<sup>1</sup>がインターネットで公開されている。

②「マッチング」(日本語指導を行う子どもと研修生の組み合わせ) 8月末以降。

③「区内の公立小中学校で、日本語指導の実践」9月以降。ほぼ毎週1回。

④「ライブセッション」

Web会議システムによるオンライン・セッション。2024年8月から12月まで6回実施。テキストについて講師が解説、課題について議論、実践について意見交流等。

⑤「日本語指導実践研究会」3月に実施。

### 3. 研修の内容：「JSLバンドスケール」と子どもの日本語教育

教育委員会は2008年より日研との協定により、区内の小中学校の現場に「JSLバンドスケール」を導入し、日本語指導を展開してきた(川上、2025)。そのため、本コースも「JSLバンドスケール」を軸に計画された。本コースで学ぶ内容は以下の通りである。

まず「事前研修」で、①子どもの日本語教育 背景・課題、②外国人児童生徒等に対する日本語指導／学校・保護者のつながり、③目黒区の日本語支援システムを学ぶ。この「事前研修」のねらいは、JSL児童生徒の日本語教育に関する政策や状況について知っておくべき情報を得て、目黒区のこれまでの取り組みを学ぶことである。

その上で、インターネット上で、独自に作成されたテキストを事前に読み、そこに設定された問い合わせ(課題)を考え、「ライブセッション」の前に教育指導課へ提出することになっている。テキストは川上が長年「JSLバンドスケール」を開発し実践してきた研究を踏まえて、子どもの日本語教育実践の基本を説明するとともに、研修生用の課題を作成した。

「ライブセッション」(6回実施)ではテキストの要点の確認と、研修生が提出した課題の回答をもとに意見交流をする。さらに研修生の実践の報告を共有し、実践のポイントと子どもの実態について理解を深める。その実践のデザインと子ども理解を深めるために「JSLバンドスケール」の理念と利用方法を学ぶ。

そのように進められたコースの後半では、自らの実践を振り返り、他の研修生や第1種指導員と意見交流する「日本語指導実践研究会」を実施した(本コースの全体像は図1参照)。

本コースの大きな特徴は、受講中に学校現場で実際に子どもの指導を行うことである。研修生がどのような子どもたちに指導を行ったのかを、以下に述べる。

- ・研修生1：小学校中高学年(3名)
- ・研修生2：小学校中高学年(3名)
- ・研修生3：小学校中高学年(1名)
- ・研修生4：小学校低学年・中学生(2名)
- ・研修生5：小学校高学年(1名)

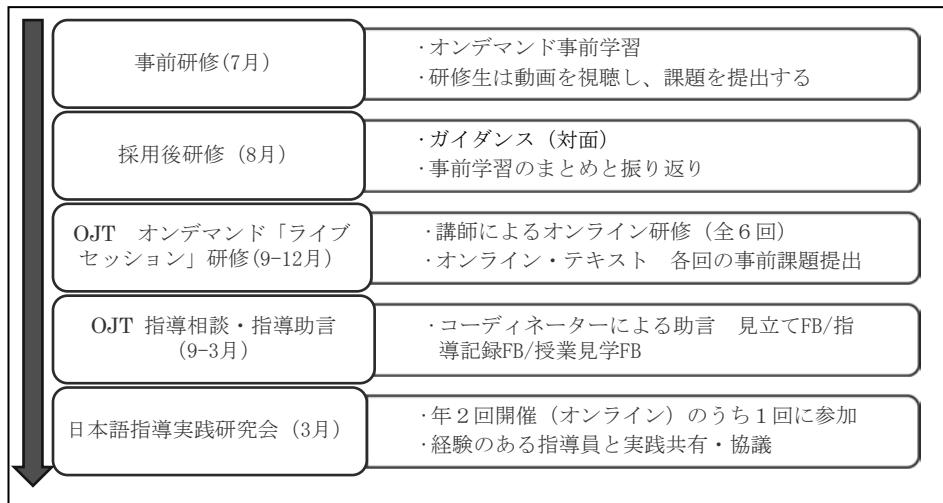


図1 「養成・研修コース」全体図

- ・研修生6：中学生（1名）
- ・研修生7：小学校低学年・中高学年・中学生（3名）

指導を受けた子どもたちの滞日期間は、1か月未満から1年程度で、家庭内で日本語を使用する環境でない子どもがほとんどであった。「JSLバンドスケール」による日本語の発達段階は「初めて日本語に触れる」レベル1から「簡単な日本語でやりとりする」レベル3の段階であった。

#### 4. 本研修に参加した研修生の声と学びの語り

2024年12月、本コースを受けた研修生を対象に、本コースの内容や学びについてメールによるアンケート調査<sup>2</sup>を依頼した。回答は任意とし、インターネット上の匿名で回答をお願いした結果、5人から回答が得られた。その主な質問と回答数は、以下の通りである。（ ）の数字は回答数。

- ・事前学習について ..... 適当であったと思う (4)、どちらとも言えない (1)
- ・研修期間の長さと回数について ..... 適当であったと思う (5)
- ・テキストについて ..... 大変参考になった (3)、参考になった (2)
- ・テキストの課題は適切だったと思うか ..... 思う (5)
- ・ライブセッションでの説明や意見交流 ..... 大変参考になった (4)、参考になった (1)
- ・「JSLバンドスケール」はどのような面で参考になったか（複数回答）
  - ..... 子どもの日本語の発達段階を理解する面 (5)
  - ..... 子どもの態度や気持ちを理解する面 (2)
  - ..... 自身の指導を振り返り、指導の方法を考える面 (4)
  - ..... 他の指導員、教員との連携を考える面 (2)

- ・ライブセッションと日本語指導の実践が同時に進められたのは  
有効だったと思うか ..... 思う (5)
- ・本コース全体で十分な学びがあったと思うか ..... 思う (5)
- ・本コースは今後のキャリア形成に役立つと思うか  
..... 思う (4)、どちらとも言えない (1)

以上のアンケートの回答結果からわかるのは、本コースの内容、運営期間、テキストと課題、ライブセッション、「JSLバンドスケール」、日本語指導実践と学びなど、概ね適当・良好であり、十分な成果があったと言えよう。

このアンケート調査の結果は、2024年12月の時点での研修生の思い・考えであった。このアンケートを実施した後も、研修生は区内の小中学校で日本語指導の実践を継続した。そこで、2025年3月に、2024年度の本コース全体を振り返り、研修生自身がどのように感じているか、考えているかをインタビュー形式で調査した。調査協力は任意とし、3人の研修生から協力があった。Web会議システムを使い、研修生1人に河上・川上が質問をする形で進めた。質問は上記のアンケート調査の項目にそって進められた。ここでは、特に研修生がどのような学びがあったと感じているかについて、以下のような回答があった。

本コースの特徴は、テキスト／ライブセッション（座学）と学校現場の日本語指導（実践）を同時に体験することで、基本的知識を実践の中で身体化し実践力を高めることにある。その点について、研修生は次のように言う。

- ・「毎回、実践ではどういう教材が良いのかなど、準備していくのはそれなりにすごく大変で時間がかかるものだと思ったんですが、総合的に考えて、座学と実践を並行でやっていくのはすごく有意義でした。あの研修がないと逆に不安だったと思います。」(Aさん)
- ・「実際にやりながらじゃないとわからないことってたくさんあると思うので、やっていて「ここわからないな」っていう時にすぐに質問できる場があるということと、学習したことをすぐに実践できる場があるという、その両方が備わっている点においてすごく効果があったと思います。」(Bさん)
- ・「進めていく中で出た課題とか悩み、話しやすかったなと思っています。有効だったと思っています。」(Cさん)

では、全体的に見て、本コースで十分な学びがあったのかどうか。

- ・「はい。すごく、学びがありました。大学院に入って、このコースを受講できて良かったなと改めて思います。実際に、座学だけではなくて、(学校で)実践することにすごく価値があります。(中略)ありがたい機会だなと強く思っています。」「カリキュラムというか、こういう流れで教えていくのが良いのではないかとか、(中略)子どもに教えるときにどういうところに注意しないといけないのかとか、どういう活動を盛り込めばいいのかとか。そういう活動の組み立て方が、今後のキャリア形成に役立つのではないかと思っています。」(Aさん)
- ・「研修では、「ことばの力」や「ことばの教育」に関して考えることが多かったと感じます。(中略)今までどうしても、内容があって、それを教えるというやり方をしてきてしまっているので、そこが大きく変わったと思います。もちろん教えたい内容が

あってそれを教えるのがだめなわけではなくて、その子どもにどうやって合わせていくかという、一対一の状況でのやり方というのを再考するきっかけになりました。」(Bさん)

・「私はどういう教室を作っていくべきというか、どういうものを作っていくたいんだろうっていう目標を、毎回毎回、更新しながらできたなっていうふうに思っていて。アドバイスとか意見もらえるっていうところからも、成長できたので、十分な学びがあったなというふうに思っています。」(Cさん)

最後に、後輩にこの研修コースの受講を薦めるかどうかを尋ねたところ、インタビューを受けた3人とも、異口同音に「子どもの教育に携わりたいという人には、ぜひ薦めたい」と回答した。

## 5. 総括と次年度へ向けて

本コースはJSL児童生徒への日本語教育を担う指導者を教育委員会が独自に養成・研修するコースとして事業化したものであり、全国的に見ても注目される先進的な試みである。基本的知識を学び実践を考える座学とともに実際に日本語指導を行う実践を合わせて実践力を高めるOJT研修として実施された点も、指導者育成教育に示唆を与える。研修生へ調査結果からも新人の日本語指導員にとって大きな学びがあったことがわかる。

一方、半年間の研修期間で研修生が担当する子どもの数は限定的である。日本語指導経験の浅い研修生が学んだことを指導に活かしていくには、さらに多様な子どもへの教育経験が必要となろう。公教育で目指す「個別最適な学び」は、日本語を学ぶ子どもの教育にも適用されるはずである。本コースにおいては、日本語を学ぶ子どもを見る研修生の目を鍛えるために、さらに多くの実践例に触れ、その実践に対する協議の場をコース内により多く組み込んでいく仕組みが今後の課題となるだろう。

## 注

- 1 テキストは、川上が作成し、以下のnoteで公開している。<https://note.com/ikuokawakami>
- 2 アンケート調査とインタビュー調査については、早稲田大学日本語教育研究科・日本語教育研究センター研究調査倫理委員会の承認を得た。(承認番号: 2107)

## 参考文献

川上郁雄 (2025) 「「目黒モデル」とJSLバンドスケール—年少者日本語教育の専門家をどのように育成するか」『早稲田日本語教育学』38号、pp.51-60.

(かわかみ かなえ 目黒区教育委員会)

(かわかみ いくお 早稲田大学名誉教授)

